

日系南米人の将来を明るく笑顔に！ 両国を知って見えた、意識改革の必要性

現在、日本のグループホームで介護福祉士をしている小澤エリサさんは、自主活動として、高齢になった日系南米人向けの介護予防教室「Siempre Genki（シェンプレ・ゲンキ）」を開催。教室運営の背景には、日系南米人の気質を知るエリサさんだからこそ気づいた危機感があった。エリサさんと、伊勢崎市での介護予防教室を共催するアイザワコーポレーションの相沢正雄会長へのインタビュー、そして介護予防教室の様子をレポートする。

日系南米人の歴史と現状

- ・ **日本人が南米にわたった経緯**：南米の国々が労働力確保等のために日本からの移民を積極的に受け入れ、日本政府も過剰人口対策等で移住を促進した。集団移住第1号は1899（明治32）年に横浜港からペルーへ発った。
 - ・ **日系南米人が来日した経緯**：日本の労働者不足等に対応するため、1990年施行の改正入管法（出入国管理及び難民認定法等の一部を改正する法律）により、日系人向けの在留資格「定住者」が新設。就労制限がなく、家族の同伴も可能な在留資格で、多くの日系人が南米から日本へ移住した。
 - ・ **言語**：日系南米人の言語は多くがスペイン語で、ブラジルはポルトガル語。
 - ・ **就業種別・状況**：工場での就労が多い。移住の際に仲介業者への手数料のために多額の借金をしたり、派遣労働の人も多く、国民年金や国民健康保険の保険料を支払えない人もいた。
- ※日本人から日系南米人と認識されている人の中には、配偶者が日系人で自身は日系人ではない人もいる

私は23歳の時、結婚を機にアルゼンチンから日本に移住した日系アルゼンチン人2世です。祖父母と私の両親は、移民政策をきっかけに南米に渡りました。両親はアルゼンチンで花の栽培・販売を営んでいましたが、インターネットも相談窓口もなかった時代に言葉も通じない南米に渡り、経済的にも自立して暮らすのはとても大変だったと思います。私はアルゼンチンでは作業療法士の資格を持っていたのですが、日本と共通で使える資格ではなく、来日してから、日本で新たに学校に入って日本語で国家資格を取得する必要があると知りました。役所の人からは「国家資格を外国人が取るのは無理」と言われ、世界共通で使えるはずの資格なのにと、悔しくて泣きました。

陽気な南米気質から見えた危機感

その後、移住外国人のための困りごと相談窓口のスペイン語相談員として様々な相談を受けるうちに、「このままでは彼らの将来が大変なことになる」と危機感を強く持つよう

になりました。主に、お金、健康、孤立の不安です。

日系南米人は出稼ぎで来日した人が多く、そのうち南米に帰るという気持ちでいたため、年金に加入しない人がほとんどでした。来日の際に仲介業者に借金をしている人も多く、加入する金銭的余裕がなかったのもあります。工場で働いている人たちが多く、景気が悪くなったりすると、あっさきに解雇されるのは外国人の可能性が高く、就業面での不安も大きい。食事は脂っこいものやジュースが大好きで、中年以降に肥満になる人も少なくありません。

このような不安がある一方で、日系南米人はとても陽気な気質。「今日を楽しもう」と考える傾向にあり、日本人と違って将来のためにコツコツ貯蓄等の備えをするという意識が薄い人が大半ではないでしょうか。とても素敵な気質なのですが、年金も万全ではなく、病気になるリスクが高い生活。経済・健康面でのリスクを含めて将来を想像すると、日系南米人のみんなの笑顔が浮かんでこなかったんです。

孤立面での不安もありました。私は一時期ペルーに住み、日系人向けのデイサービスでボランティアをしたことがありました。そこで日本の「故郷」等の童謡を歌いながら涙を流す人を見たときに、日本に住む日系南米人も同じように、長年住んだ故郷を懐かしみ、それを仲間と共有する場所が必要なのではないかと思いました。

日本で暮らす日系南米人には、介護サービスを拒否する



取材協力 ▶

小澤エリサ さん

SIEMPRE GENKI 介護予防教室 主催
介護福祉士、介護予防運動指導員